（『国語学』176集　1994・3・31）

〔書　評〕

『古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析――』

鈴木　泰著

金　水　敏

一、構　成

本書は表題の通り、源氏物語を資料とした動詞のテンス・アスペクトの調査・分析の報告であるが、古典文法の専門書としては、画期的とも言える特色をいくつも持っている。その特色について触れる前に、本書の構成について概観しておこう。

本書は、次の七章からなっている。

第一章　はじめに
第二章　通達動詞のテンス・アスペクト
第三章　移動動詞のテンス・アスペクト
第四章　～ツ形と～ヌ形の諸問題
第五章　～キ形と～ケリ形の諸問題
第六章　～タリ・リ形の諸問題
第七章　おわりに

この章立ては、さらに第一章から第三章までの前半部と、第四章以降の後半部とに大きく二分することができる。前半部は本書の中核をなす部分で、章の題名にもあるように、源氏物語から通達動詞（言語的伝達動詞）と移動動詞を抜き出して、そのテンス・アスペクトについて包括的に分析している。後半部は前半部の補強とも言える部分で、動詞の語形（いわゆる助動詞）中心の分析法を採り、研究史をにらみながら、動詞の種類も適宜広げ、議論に厚みを与えている。第七章は前半部と後半部の考察の上に立ったまとめである。

二、方　法

本書は、奥田靖雄、鈴木重幸、高橋太郎、工藤真由美らの現代日本語のテンス・アスペクト研究の蓄積に全面的に依拠しており、その点が最大の特徴をなしている。以下に述べる本書の方法は、これらの研究者にも共通するものといってよい。

まず、ツ、ヌ、タリ、リ、キ、ケリ等の形態の個別的な研究ではなく、それらの積極的な形態が付かない基本形も含めた、動詞語形の対立的システムとしてテンス・アスペクト的意味を考察する、という点である。ことに、基本形の意味・機能は国文法研究の伝統の中では少数の研究を除き看過されてきた問題であるだけに、重要である。

第二に、やはり中世以来の国文法の伝統ともいうべき和歌中心の研究から離れ、源氏物語というテキストを扱うにふさわしい方法を

導入した、という点である。具体的には、会話・和歌と地の文を区別し、後者においてテンス・アスペクトが果たす「テキストの分割と構造化」という、いわば「テキスト的意味」に着目した、ということである。

第三に、各語形の構造的対立を的確に捉えるために、動詞本体の意味のグループ分けに注意を払ったという点が挙げられる。特に金田一春彦以来の動詞のアスペクト研究においては、動詞の意味分類がアスペクトと密接に結びついているという認識が常識化しているだけに、古代語研究においても当然採られてよい方法である。ただし、残念ながら本書では源氏物語のあらゆる動詞が対象となっている訳ではなく、第二章、第三章の標題が示すとおり、通達動詞・移動動詞が主たる分析の対象として選ばれている。このように動詞の種類を限定した理由は、著者によれば、まず単純に量の問題であり、すべての動詞を対象とすると一万にせまる用例数となって扱えない、ということによるという。中でもこの二種の動詞にしぼった理由は、以下のようなことがらによる。

●両者とも、種々の語形にわたりかなりの用例が見いだせる（ことに、～ツ形、～ヌ形の両方が拾える）。

●通達動詞は動作動詞（始発・動作過程・終結の局面に分割可能）で、移動動詞は変化動詞（変化・結果の局面に分割可能）であり、動詞を代表する二大グループを見渡すのに都合がよい（移動動詞は基本的には変化動詞であるが、同時に主体の動作をも表す点で注意を要する、とも著者は述べている）。

●移動動詞は限界動詞（語彙的意味の中に、運動の終結の限界点を持つ）であり、通達動詞の多くは非限界動詞である、という点で、この観点からも二つの代表的グループにわたっている。

第四に、動詞の構文的役割や、文の伝達上の課題といった、動詞の使用環境にも注意を払っているという点である。動詞の構文的役割とは、動詞が用いられているのが主節か従属節か、ヴォイスや否定やモダリティ等に埋め込まれているか否かという観点である。この点についても著者の態度は慎重であり、本書での検討の対象は「構文的には、動詞が終止形述語、又は係結びによる連体形述語、已然形述語などの終止法に用いられている場合に限るということであり、形態論的なカテゴリーの点では、推し量りや働きかけや希求のムードの場合、受動態や使役態の場合、そして否定の場合は除き、述べたて又は疑問のモダリティーで肯定の断定に用いられている場合に限る」（一二頁）ということである。また、文の伝達上の課題とは、いわゆる発話行為に類することがらで、特に伝達上の焦点の有無、すなわち当該の動詞が表す事態が聞き手または話し手にとって新たな情報であるか（伝達上の焦点有り、「告知」）、それとも既に知られている事態をなぞっているだけか（伝達上の焦点無し、「確認」）という点について注意を払う、というものである。

テンスやアスペクトの分類概念も、やはり先の奥田、鈴木、高橋、工藤らが用いているものに概ね従っている。例えばアスペクトは、おおよそ「完成相」「継続相」「パーフェクト」の三つが区別されている。またテンスでは、相対的／絶対的、またアクチュアル／非アクチュアル、パーフェクト的／アオリスト的等の区別がなされることがある。これらの概念については、当該箇所で説明があるが、必ずしも親切なものではなく、やはり先行研究に関する知識があった方がよいようである。この点に関しては、後に評者の感想として再

び述べたい。

三、分析の検討

先に述べたように、第二章、第三章では、通達動詞、伝達動詞について、会話文、地の文に場合分けしながら具体的な分析を行っている。その結果を概観するために、一覧表を作ってみた。この表は、簡単化のために当然ながら多くの情報を落としているので、詳しくはぜひ本文に当たられたい。

以下では、後半部の議論もふまえながら、語形別に本書の分析とその問題点について述べていく。

三・一　基本形

先にも触れたように、本書以前で古典語における基本形のテンス・アスペクト的意味を正面切って取り上げた研究は非常に少ない。その点で、本書の分析は大いに注目に値する。基本形で最も問題となるのは、そのアスペクト的性格であろう。古典語の基本形に継続的意味のあることは既に指摘されていたが、本書では、基本形の文におけるアスペクチュアリティが会話文と地の文で若干異なることを明らかにした。即ち、通達動詞・移動動詞とも、会話文で用いられる場合にはおおむね不完成的（継続的）な意味を表すのに対し、地の文では、完成的意味で用いられるものが非常に多い（ただし、通達動詞の場合、完成的意味になるものの九〇%は「～と」等の形で有限の発話内容を伴う。五一頁）。著者はこのことから、一旦は、これらの動詞の形態論的なアスペクトが会話文では不完成的、地の文では完成的であると結論する。しかし他の可能性として、本来基本形のアスペクトは中立的であり、動詞の語彙的意味や地の文が「歴史的現在」を表現することなどの諸条件により、アスペクチュアリティが決定されるのではないかとの仮説をも提出している。会話文と地の文という使用環境の違いで形態論的なアスペクトが異なってしまうという説は何とも奇妙であり、この「中立説」しか成り立たないように評者には思えるが、著者は慎重にも「今後の動詞全体のアスペクチュアリティーの検討にまたなければならない」（三二一頁）としている。

ところで、例えば現代語でも、「桜の散る中を歩いていく」のような連体修飾節の中では、基本形が同時的・継続的なアスペクチュアリティーを表すことがあるし、主節でも、「思う」「考える」等の思考動詞を中心に、基本形が不完成的な意味を表すことが知られている。また、日記など特殊な文体では基本形が継起的な出来事を表す。これらのことを思うと、古代語と現代語とで基本形の形態的なアスペクトにはさほど違いがないとの見方もできる。違いがあるとすれば、現代語には動作の進行・継続を現せるシテイル形があり、古代語にはないという点であろう。基本形がこのようにアスペクトに関して終止中立・消極的であると考えると、基本形の形態的な無標性ともよく合致する。

むろん、右の考え方はいろいろな現象をきわめて単純化しており、細かい検討が必要であることは言うまでもない。また本書の課題は「源氏物語を資料とした共時論的分析」（一二頁）であり、テンス・アスペクトの歴史的な変遷はとりあえず考察の外に置かれている。歴史的研究も含めて、著者のいうとおり、今後の研究がまたれるところである（著者の歴史的変遷に関する概観として［5］がある）。

三・二　～タリ・リ形

本書では、～タリ形と～リ形は接続上の制限の違いがあるだけで、基本的に同一の範疇として扱われている。表に示したように、通達動詞、移動動詞ともに～タリ・リ形は完成的アスペクトを表し、テンスとしてはアクチュアルな過去を表している。ただし単に動作の完成を言うだけではなく、何らかの動作の結果が場面に残される点に特徴があり、その点で移動動詞における～ヌ形の「消失」の用法と対立を見せる。しかし、表からははずしてあるのだが、通達動詞の中でも「書く」という動詞について見ると、動作の完成よりも客体の結果の状態が表されるという。結局、～タリ・リ形には次の二つの意味が認められる。

(1)　a.変化の結果の継続、ないしは単純な状態
　　c.動作の化成とその結果の存在

著者は、両者がどのような関係にあるか考察をめぐらせ、その候補として、次のような可能性が挙げている。

(2)　a.～タリ・リ形は本来完成的である
　　b.～タリ・リ形は本来不完成的である
　　c.(1)aは状態的なパーフェクト、(1)bは動作的なパーフェクトである
　　d.～タリ・リ形は元来不完成的であったが、源氏物語の状況は完成的なシタ形へと推移していく過程を示している

そこで、他の種類の動詞にも調査対象を広げて見ると、結局(1)aになるか(1)bになるかは、動詞の語彙的意味（結果性の有無）によって決まっていることが分かる。その点で、会話文と地の文でアスペクチュアリティーの現れ方が異なる基本形とは事情がことなり、(2)aとも(2)bとも決めることはできない。また(2)cは［4］で示された考え方であるが、～タリ・リ形の意味が「パーフェクト」の定義に合わないことから、著者自ら否定している。(2)dは、万葉集の時代から既に完成的意味の用法が見えることから、もっと長いスパンで見ることが必要であるとしている。

結局この問題も最終的な解決は今後の課題として残されたことになるが、問題点の的確な整理という点で、本書の記述はきわめて貴重である。評者は、本書の～タリ・リ形や現代語のシテイル形、シテアル形等も含めてこれらを状態化形式と呼び、その歴史的変遷、方言における分布、統語構造等について統一的な解釈を試みつつある（その一端を［1］として発表）。今後も、本書をステップとして新たな研究が生み出されていくことと期待される。

なお、筆者は「少なくとも源氏物語においては、～タリ・リ形に動作の継続を表すと見られる例はまず見出せないのである」（三二三頁）としているが、次のような例は結果の状態であろうか、動作の完成であろうか。

(3)　八月廿日餘日の有明なれば、空の氣色も、あはれすくなからぬに、大臣の、闇に暮れ惑ひ給へるさまを、み給ふも、ことわりにいみじければ、空のみながめられ給ひて（葵）

「暮れ惑ふ」という動詞には結果性は認められず、しかも「さま」を修飾しているところから、動作の完成とも考えにくい。結局、心理状態の継続と考えざるをえないのではないだろうか。このような例は、思考・感情を表す動詞に少なからずみられるようである。もしこのような～リ形（～タリ形にも類例があると思われる）が見落とされているとすれば、それは連体修飾用法が対象の外にあったからであ

ろうか。

三・三　～ツ形・～ヌ形

～ツ形と～ヌ形の類似点・相違点については、従来さまざまな研究が重ねられてきており、著者もそれらに丁寧な検討を加えつつ考察を進めている。本書での、源氏物語の用例に基づいた一応の結論は、「～ツ形も～ヌ形も動作の完成を表すもので、テンスに関しては中立的であるが、アクチュアルな事態を表し、基準時に対して直前に動作が完成したことを意味する。なお～ツ形は動作の終結を、～ヌ形は変化の終結を表す」というものである。通達動詞も移動動詞も、ともに～ツ形も～ヌ形も存在するが、それはこれらの動詞が動作として指し示される場合と、変化として指し示される場合の両方があるからで、他の多くの動詞では、主に動作を表すか、変化を表すかによって～ツ形か～ヌ形かが決まってくると述べている。

～ツ形と～ヌ形を動作対変化として見るという本書の捉え方は、筆者の取り上げた現象（例えば、移動動詞において～ツ形が多く一・二人称者の到着を表し、～ヌ形が出発、消失を表す）をうまく説明している。本書が他の部分の説明においても活用している動詞の語彙的意味の分類がうまく生かされていて、従来の説に比べても遜色なく、一説たり得ていると思う。しかし、本書にあらかじめ設けられた限定を承知しながらも、ある種の物足りなさを感じるのも事実であるのでやはり今後への注文ということで一言つけ加えておく。それは、「動作対変化」というときの動作とは、あるいは変化とは結局何であるかという点について、掘り下げる必要はないかという点である。八

	通達動詞		移動動詞	
	会話文	地の文	会話文	地の文
基本形	不完成的＋非アクチュアルな現在	完成的または不完成的	不完全的＋アクチュアル／非アクチュアルな現在	完成的または不完成的
～タリ・リ形	完成的　結果の存在	完成的＋アクチュアルな過去　結果の存在	完成的　到着・出現結果性においてパーフェクト性	完成的　到着
～ツ形	完成的＋アクチュアルな過去　動作の終結	（少数につき省略）	完成的＋アクチュアルな過去　到着（一・二人称）　直前性においてパーフェクト性	（少数につき省略）
～ヌ形	完成的＋アクチュアルな過去　変化の終結	（少数につき省略）	完成的＋アクチュタルな過去・未来　消失	完成的　出発、消失
～キ形	完成的＋アクチュアルな過去　目睹回想	現在との対比	（少数につき省略）	（少数につき省略）
～ケリ形	非アクチュアルな過去　伝聞、気付き、説明等	非アクチュアルな過去　特徴付け、条件―帰結等	非アクチュタルな過去　伝承	背景説明　条件―帰結　特徴付け

頁には「その表す運動が始発・動作過程・終結の局面を持つ動作動詞」「その表す運動が変化、結果の局面を持つ変化動詞」という定義が述べられてはいる。しかし、例えば四一〜四二頁辺りで通達動詞が動作動詞でありながら変化としても捉えられるという説明を見ると、主観的な認定の問題のように思われ、著者が退けた山田孝雄らのムード的な説明との相違も鮮明でなくなってくるのである。極端に言えば、ツの付いた動詞は動作、ヌの付いた動詞は変化と認められているのだ、という循環論にも陥りかねない。むろん、個々の用例について慎重な検討が重ねられた上での結論であることは理解できるが、事後的な解釈でない、明示的説明がほしいところである。

三・四　〜キ形・〜ケリ形

〜キ形はアクチュアルな、そして現在とは切り放されたアオリスト的過去である、というのが〜キ形に関する本書の説明である。会話文においては話し手が現実に体験した出来事を指し示すといういわゆる「目睹回想」の意味は、「古代においては現実とみなされる範囲が話し手の直接体験に限られていた」（三二八頁）ことから生じるとも述べている。

〜ケリ形に関しては、従来、諸説紛々として結論をみないところであるが、本書では非アクチュアルな過去という中心を定めて、伝聞、気付き、条件に対する帰結、主語の特徴付け、背景の説明等の用法の根拠を、「動詞からアクチュアルな性格を奪う」というケリの働きから説明している。従うべき卓説である。

四、さいごに

以上の、評者による無雑な概括によってさえ、本書の内容が従来の国文法書の伝統的スタイルを越え出た画期的なものであることは十分に見て取れるであろう。めざましい新見に満ち満ちているにも関わらず、著者の態度は慎重すぎるといってもいいほどであり、好感が持てる。各用例すべてに現代語による説明（現代語訳ではない）が付いている点も、行き届いている。ぜひ、古典の専門家だけでなく、現代語や外国語の研究者にも一読を勧めたいところである。

最後に、蛇足ではあるが、二点だけ感想めいたことを述べさせていただきたい。まず、最初に触れたように、本書の記述は奥田靖雄らの現代日本語の研究から多くの部分を負うている。特にその用語について、部分部分に簡単な説明はあるが、完成的／不完成的、アクチュアル／非アクチュアル、パーフェクト等の概念は、国文法ではなじみの薄いものであるだけに、ぜひとも一定の頁を裂いて、まとめてこれらの概念の定義の整理を行い、あわせて現代日本語のテンス・アスペクト史における簡単な位置づけをしておいて欲しかった。

第二点として、本書で分析の対象が主節の動詞の分析に限定されていることについて触れたい。研究の順序としてまず主節から、とする筆者の考え方もよく理解できるが、果たして主節が動詞の最も基本的な意味を常に表すかどうかという点については、疑問もある。特にアスペクトに関しては、連体修飾節のような従属節においてこそ、その中心的な意味が見えやすいということもあるのではないか。例えば［2］では不完成的（状態性）述語に「前」「後」を修飾する用法がないことから、これらの述語には前後の局面が存在しないことを述べているが、この方法にならって、例えば「のち」[注]を修飾する述語の形態を調査する、といった方法が試されてよい。文内の構

造に関する考察も並行して行っていけば、より研究が深まるのではないかと思った。

以上、評者の能力と枚数の制約もあり、皮相な紹介にとどまり、読み誤りや舌足らずなものいいも多々あったかと虞れる。ともあれ、日本語古典文法研究の一層の活性化のために、本書の登場を多くの読者とともに心から喜びたいと思う。

〈注〉評者が源氏物語を対象に簡単な調査を行ったところ、「〜テ後」「〜ナム後」「〜ニシ後」「〜ヌル語」「〜シ後」等は見られたが、基本形が現れることはなかった。ここから、これらの形態と完成性との関連を述べることも十分可能であろう。なお、[7]も参照されたい。

参考文献

[1] 金水　敏（一九九三）「日本語の状態化形式の構造について」平成五年国語学会秋季大会研究発表

[2] 工藤真由美（一九九二）「現代日本語の従属複文」*Journal of the Yokohama National University* Sec. II, No. 39

[3] 佐伯梅友・鈴木　泰・鈴木康之・松本泰丈（一九九三）「座談会新しく語る源氏物語の文法」『国文学　解釈と鑑真』五八-七

[4] 鈴木　泰（一九九一）「古代語文法研究のために」『国文学　解釈と鑑真』五六-一

[5] 鈴木　泰（一九九三a）「時間表現の変遷」『言語』二二-二

[6] 鈴木　泰（一九九三b）「源氏物語会話文における動詞基本形のアスペクト的意味」『武蔵大学人文学会雑誌』二四-二・三

[7] 井島正博（一九八六）「時間の起点を表わすノチとヨリとの相違」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院

（平成四年五月一六日発行　ひつじ書房刊　A5判　三四〇頁　四二三三円）

——神戸大学助教授——

（平成六年二月三日　受理）